

来春、最後の学生たちが卒業すると、神戸海星女子学院大学はその歴史に幕を下ろします。この節目にあたり、海星の歩みを振り返るとともに、私たちが生きる時代について考えてみたいと思います。

神戸海星女子学院大学は1951年に創立され、短期大学は1955年、大学は1965年に開学しました。その源流は、1877年にフランスで創設されたマリアの宣教者フランシスコ修道会にあります。修道会は1898年に来日し、病者や貧しい人々への奉仕を行うとともに、戦後は教育活動に力を注ぎ、多くの生徒や学生を育ててきました。

時代の変化とともに、修道会は2004年に教育分野での使命を終え、海星を離れました。その後も青谷の修道院は残り、多くの卒業生にとってシスター方の存在は心の支えであり続けました。しかし今年5月、その修道院も閉じられ、シスター方は新たな地へと旅立たれました。神戸海星女子学院大学の閉学と重なるように、一つの時代が静かに幕を下ろそうとしています。

私たちは今、大きな転換点に立っています。世界では他者への尊敬や共生の精神が揺らぎ、社会や価値観も大きく変化しています。また、AIをはじめとする科学技術は急速に発展し、私たちの暮らしや働き方を大きく変えています。その一方で、SNSによる誹謗中傷や情報の分断、AI活用に伴う倫理的課題など、新たな問題も生まれています。

教皇レオ14世は今年発表した回勅の中で、人類は今、新たな「バベルの塔」を築くのか、それとも神と人が共に生きる世界を築くのかという選択の前に立っていると述べられました。便利さや効率性だけではなく、人間の尊厳を守りながら未来を築いていくことの大切さを問いかけています。

AI時代だからこそ、人間にしかできない共感、倫理観、創造力、そして他者を思いやる心が、これまで以上に大切になるのではないのでしょうか。相手の痛みに寄り添い、支え

合いながら歩む力こそが、人と人とを結び付ける原点であるように思います。

海星の終わりは、単なる終わりではなく「変化」です。海星で学んだ「神を愛し、人を愛すること」「他者に仕え、共に生きること」「他者の幸せを願うこと」は決して失われません。その精神を次の世代へ受け継いでいくことこそ、私たちに託された大切な使命です。

スペインのサグラダ・ファミリアも、ガウディの志を受け継いだ多くの人々の努力によって、150年の歳月を経て完成しました。一人の思いは人から人へと受け継がれ、時代を超えて未来へとつながっていきます。

神戸海星女子学院大学の歴史は幕を閉じます。しかし、海星の精神はこれからも私たちの中に生き続けます。人を愛し、支え合い、より良い社会を築こうとする心を未来へ受け継ぎ、新しい時代への希望につなげていきたいと思ひます。